



リチャード・エマート 大島政允 ジャネット・チョング
 サウスバンクセンター (ロンドン) 「清経・パゴダ」初演後の質疑応答で (2009.12.2)



第 21 号

(年 2 回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂

〒720-0814
 広島県福山市光南町2-2-2
 TEL 084-923-2633

広島県教育賞を受賞して

喜多流職分 大島 政 允

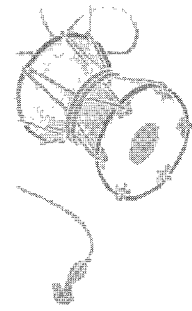
昭和三十二年、十五才で東京の喜多流十五世宗家喜多実先生の内弟子に入つて以来、この道を進んで来まして五十余年になります。この度平成二十一年度の広島県教育賞を頂きました。ご一緒に広島市在住で小鼓方の横山晴明先生も受賞され、広島県において能楽の教育価値が認識されてきた証ではないかと嬉しく思っています。能楽は江戸時代には武士の式楽として栄え、明治維新後は一時衰微しましたが、政財界の強いバックアップで再興いたしました。しかし、第二次大戦後の六十年間、日本の学校教育では西洋文化が主流となり、日本の伝統文化はほとんど、教えられませんでした。ここ数年前よりやっと日本文化を教育の場にと文部科学省も動き出し、その機運を受けての今回の受賞となつたのではないかと思っています。

おかげさまで昨年五月には北欧二ヶ国で、十二月にはヨーロッパ三ヶ国で演能する機会を得ました。しかし、残念なことに現在の教育現場には能楽をはじめとして日本文化を正しく指導できる指導者はごくわずかです。今後、日本の伝統文化をどのように継承し、指導者を育てていくかは急務の課題であります。

今後とも皆様方の温かいご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

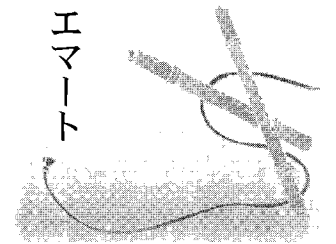
- P2 英語能「パゴダ」への道
リチャード・エマート
- P6 謡曲と私と広島大島会
松宗 勉
- P8 小謡「宗吉瓦窯」を書いて
森 和子

英語能「パゴダ」への道



シアター能楽芸術監督
武蔵野大学文学部教授

リチャード・エマート



二〇〇九年十二月、英語能「パゴダ」のロン
ドン公演がNHKテレビで、そして今年一月に
は広島島のRCCテレビでも報道された。

中国系イギリス人ジャネット・チョング女史
が書いた台本で、アメリカ人が結成した劇団
「シアター能楽」と大島衣恵さんや日本人能楽
師とのコラボレーションで、日本伝統文化の中
で難しいとされている能楽が英語で上演される
ことよって新しい感動を外国の観客に与えた
と紹介された。

このテレビニュースを見た日本人はどう思っ
ただろうか。単にびっくりしただけの人、日本
文化が世界に紹介され誇りをもった人もいたで
しょう。または日本の難しい能は外国人には解
るわけない、日本のプロがやっている能公演と
比べて大した能公演はできないだろうと思っ
た人もいたでしょう。

初めて相撲の世界に外国人力士が幕の内に出
てきた時と似たような見方だったかもしれない
し、逆に日本人が初めてバイオリンやピアノの
世界コンクールに出場した時とも似ていたのか
もしれない。

この英語能が突然の出来事だと思う人もいる
でしょうが、この英語能「PAGODA」公演は、
数十年にわたって何曲もの英語能の歴史の中か
ら培われた経験と努力から生まれたもので、突
然の出来事ではない。六〇〇年以上の古典能の
歴史と比べて英語能の歴史はほんのわずかな年
数だが、少しずつ意義のある充実した歩みが始
まっている。

能を英語で上演する目的を持っているシアター
能楽という劇団は二〇〇〇年に結成された。一
九九一年東京で、一九九五年には米国ベンシル
ベニア州ブルームスバークという町で「能トレ
ニング・プロジェクト」を私は立上げ指導して
いたが、このワークショップに参加した数人に
呼びかけた。参加者は皆、既に数年間古典能を
稽古していて、能の力を感じ、それを自分の母
国語である英語で新作能を上演したい願いを持っ
ている。

実はそれ以前にも私は英語能や能らしき英語
作品の上演にいくらか関係していた。ここで、
ある程度の英語能の歴史を、私やシアター能楽
が関係している演目から簡単に紹介しよう。



リチャード・エマート氏

英語能の劇団「シアター能楽」芸術監督
武蔵野大学文学部教授
能の喜多流仕舞教士

1949年、米国オハイオ州生まれ。

1968年、アーラム大学入学。

1970年、初来日、早稲田大学国際部で勉
強し、伝統邦楽と芸能に興味を持つ。

1972年、アーラム大学卒業後、再来日。

1973年より能の実技を習い始め、その後、東京芸術大学で日本やアジア
伝統芸能を研究し、修士号を習得。博士号終了。

英語能の作曲、演出を数多く手掛け、1990年、CD「英語能」を出す。
国内外で能のワークショップ、レクチャー、公演など意欲的に活動中。

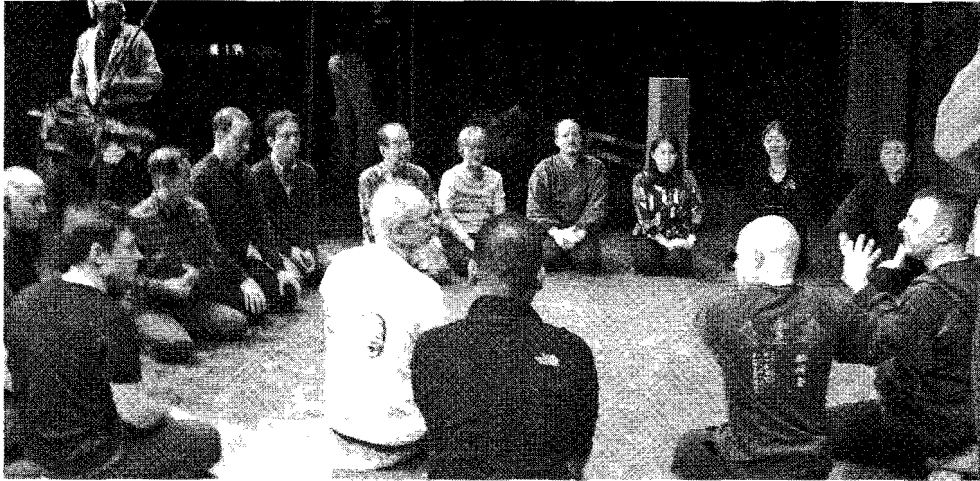
聖フランシス「St. Francis」

(一九七〇年初演)

作 アーサー・リトル(米国インディアナ州ア
ーラム大学元演劇学教授)

作曲 レナード・ホルビック(アーラム大学元
音楽学教授)

振り付け エレノール・キング(一九五〇年代
からの米国の名モダンダンサー)
あらすじ クエーカー教の旅人がインドのカル



【清経・PAGODA】のうち合せをNHKロンドン支局取材中(2009.12.1)

カッタで道ばたの乞食に出会い、その乞食がアツシジのフランチェスコ(聖フランシス)の霊であることがわかる。夢幻能の構成。

背景 早稲田大学と交流のあったアーラム大学の両先生が一年間日本に滞在し、能を勉強した

後作られた作品。能のゼミが行われた後、アーラム大学学生(リチャード・エマートも参加)によって上演。

一九七五年、東京で再演。アメリカ人狂言役者ダン・ケニー演出、リチャード・エマート音楽監督、松井彬(喜多流シテ方)型付。

一九八八年、アーラム大学の学生により再演。エマート編曲。松井彬と共同演出。

鷹の井 [At the Hawk's Well]

(一九一六年初演。一九八一年英語能としての初演)

作 ウイリアム・B・イエーツ(アイルランドの詩人、劇作家)

あらすじ ケルトの若き英雄クーフリンが永遠の生命を求めてその井戸を探しにやってくる。

そこに、その水が湧くまで五十年も待った老人と鷹の精にとりつかれ泉を守る女性もいる。やつと水が湧き始めると、鷹の精の女は飛び回り、結局クーフリンも老人も水を飲めないで終わる物語。

背景 イエーツが能の英語翻訳にインスピレーションを受けて作詞。能の古典構成と全く関係なくとも、能らしさを表現し、その後日本に逆輸入され、能研究者・演出家の横道萬里雄氏による新作能「鷹の井戸」や「鷹姫」が作られた原曲。

一九八一年、京都、大阪の能楽堂で上演。能の作曲はエマート、演出はNOHO劇団のジョナー・サルズ。

その後、日本やオーストラリアで再演。エマー

ト、松井彬の演出。

二〇〇二年、シアター能楽が米国で八回、七会場で初上演ツアー。エマート演出。鷹の役、松井彬。

クレイジー・ジェーン(物狂ジェーン)

[Crazy Jane] (一九八三年)

作・作曲・演出 デビッド・クランドル(元宝生流内弟子、現在シアター能楽会員)

あらすじ 物狂いのジェーンという女が昔の恋人トムを探しながら諸国を放浪する。ある田舎町の教会で若者に出会い、その若者が否定してもジェーンは彼がトムだと信じ、若者を誘いながら踊りだす。やつと若者も昔のように一緒に踊り出すと、しばらくしてジェーンが急にいなくなる。最後にジェーンを探している若者が残り、やはり若者がトムだったのか、恋の物狂いはジェーンではなくその若者だったのか。

背景 元の上演はクランドル氏の西洋楽器と能の動きによるものであったが、二〇〇二年に能風の作曲に改め、二〇〇七年にシアター能楽の米国ツアーで上演。

漂炎 [Drifting Fires] (一九八五年)

作 ジャニン・バイチマン(日本文学・詩の翻訳者、大東文化大学教授)

作曲 リチャード・エマート

型付 梅若猶彦(観世流シテ方、静岡文化芸術大学教授)

あらすじ 未定の未来ストーリーで、ある宇宙の旅人が元地球であった場所で地球に住んだ最

後の人間、老女に出会う。もう無き地球のことを嘆きながら、その美しさを思い出しながら舞う。

背景 一九八五年、筑波万博で初演。一九八六年、東京の増上寺本堂で再演。夢幻能構成。

イライザ [Eiza]

(一九八九年)

作 アラン・マレット(元シドニー大学教授、日本の雅楽やオーストラリアの先住民の音楽研究者)

作曲 リチャード・エマート

型付 松井 彬

あらずじ ある旅人がオーストラリア東北のフレーザー島に來ると、十九世紀前半に難破したイギリス船の船長婦人イライザ・フレーザーの亡霊に出会う。彼女は一年間先住民たちと住んだあと、シドニーやロンドンに戻り、先住民への差別感にあふれた嘘の恐ろしい作り話をして、人気語り手になる。しかし、それは嘘であることを悟り、祭りで先住民と踊ることによってその文化に理解を示すようになる。

背景 一九八九年、シドニー大学の能プロジェクトで学生による公演が実現。リチャード・エマートと松井彬の演出。また一九九〇年に東京の梅若能楽学院会館で再演。夢幻能形式。

クレージー・ホース [Crazy Horse]

(二〇〇一年)

作 エリック・エーン(米国劇作家、ブラウン大学教授)

作曲 リチャード・エマート

演出 土居由理子(サンフランシスコのシアター・オブ・ユウゲンの創設者)

あらずじ アメリカン・インディアン若者が夢を見て旅に出かけ、十九世紀のオグラ族の戦士クレージー・ホースの霊に出会い、自分の文化を改めて考え、平和の祈りをする。

背景 二〇〇一年、サンフランシスコ、ジャバタウンの平和塔前で初演。二〇〇五年、別名「ラウタの月(Moon of the Scarlet Plums)」として再演。日本の愛知万博や東京のシアターX、またアメリカでも三ヶ所で上演。シテは野村昌司(観世流シテ方)。

カモメ [The Gull]

(二〇〇六年)

作 ダフネ・マラーツト(カナダのブリティッシュコロンビア州の詩人・小説家)

作曲 リチャード・エマート

型付 松井 彬

あらずじ 若い日系カナダ人の漁師が戦争中に抑留所に入れられ、そこで両親は亡くなる。抑留所を解放された後、初めて船に乗って出かけ、カモメの形になった母の霊に出会う。母は結婚するため和歌山県からカナダに渡ったので、死ぬ前に母国の日本に戻りたかったが、日本を知らない息子たちに反対され、とうとう帰ることができなかつた。亡霊と息子たちがそれぞれの立場を語り、家族の概念を考える作品。

背景 バンクーバー郊外のリッチモンド市で、松井彬とエマートの演出でカナダのプロの役者たちによって初演。夢幻能形式。

パイン・バレンズ(不毛の松)

(二〇〇六年)

作 グレーグ・ジオバニー(米国の劇作家、演出家、シアター能楽の会員)

作曲・演出 リチャード・エマート

あらずじ 米国ニュージャーシー州東海岸にある松しか生えない寂しい不毛の地方で知られている伝説には恐ろしい鬼、ジャージー・デビルがいるという。二人のウィツカンの僧がこのパイン・バレンズに消えた仲間を探しにいき、若い少年に出会い、後半そのジャージー・デビルとして現れ、僧たちが祈りによりとうとうそのデビルを押さえる物語。

背景 二〇〇三年以来シアター能楽は劇作家のための能脚本作成ワークショップを主催しているが、その第一回に参加したジオバニーさんの作品。二〇〇六年のシアター能楽の米国ツアーで上演。

隅田川 [Sumida River]

(二〇〇九年)

古典能の英語版

翻訳編曲 リチャード・エマート

背景 ハワイ大学の能プロジェクト、一年間の能授業の集大成の公演。エマート指導・演出。(松井彬、大島衣恵指導)

パタダ [Pagoda]

(二〇〇九年)

作 ジャネット・チヨング(中国系イギリス人、詩人、教育アドバイザー)

作曲 リチャード・エマート

あらずじ イギリス人女性が中国へ旅をし、亡

父の故郷を探す。そこで祖母や叔母の亡霊に出会い、幼い時に父が家族と離れた話やその家族の苦労や悲しみを語る。そこに父の亡霊も現れ、若い旅人は父と祖母、叔母が魂の世界で再会していることを悟る。

背景 二〇〇九年十二月、大島能楽堂と能楽のプロとシアター能楽がヨーロッパで共演し、三ヶ国四ヶ所(ロンドン・ダブリン・オックスフォード・パリ)で公演。シテ(祖母の霊)大島衣恵。シテツレ(父の霊)大島輝久・松井彬。

以上のように幾つもの英語能の経験を元に、英語能「パゴダ」公演は実現した。大島政允師の助言と大島能楽堂始め、他の能楽師の方々のご協力でシアター能楽にとっては今までで一番大きな仕事となった。

特に大島衣恵氏には大変な仕事をして頂いた。能楽師として彼女の演技の力強さと謡の美しさに私は以前から魅力を感じていたが、今回は英語の謡を強いたわけで、日本語の謡と同じように英語の謡ができるかは心配だった。しかし、予想以上に彼女は英語での謡をこなした。古典能で培った力強さを英語能にも発揮し、「パゴダ」のストーリーが観客を感動させただけでなく、能という日本の古典芸能が英語であつても観客を感動させた。衣恵さんの水準高い演技に引っぱられてシアター能楽もレベルアップできた。

能は日本の伝統芸能として長い歴史があることはいままでもない。伝統芸能であるので、何よりも伝統を守らなければいけないとの考えが強い。しかし、能はその歴史の中で日本社会の



リハーサル ロンドン大学にて(2009.11.30)

歴史とともに変化している。世阿弥の時代後、装束が豪華になり、五番立ての分類になったり、大名としてのパトロンが無くなったたり、能楽堂ができたたり、電気を使ったり、色々と変化している。

現在、話題になっている一つは能に携わる女流の数が増えていること。反対する人がいても時代とともに増え続けている。女性が社会のあらゆる分野に進出していると同様、能の世界も同様である。私個人の考えはその不可避な状況をどう包容すべきかを論じるべきと思う。

オペラは昔、ヨーロッパではイタリア語でし

か歌われなかったが、今ではフランス語、ドイツ語、英語、日本語でも歌われている。英語能の状況はそれとは少し違うが、能も日本語以外の色々な言語で謡われる可能性はある。

能は日本の伝統的な芸能でありながら、日本人以外の人々にも大変な魅力を感じさせる芸能である。「能は日本だけの芸能でなく、世界の芸能」と思っている。

現在、シアター能楽は未熟な歩みが始まったばかり、この試みがどこまで続くのか、少なくとも現在、我々は能に感動し、その感動を英語で話す人々にも何とか伝えたいと強く思っている。



英語能「PAGODA」(ロンドン公演 2009.12.2)

シテ 大島衣恵 ワキ ジュピリス・ムーア シテツレ エリザベス・ダウド

謡曲と私と広島大島会

広島大島会会長

松 宗 勉

(1) ある友人からの電話のこと

「あなたの習っている謡曲の先生は大島先生じゃろう!! 大した先生じゃのう!! 今朝の新聞で見たで!! あなたもとうとう最高を究めたのう!! こんな良い先生に習って、しかも広島大島会の会長をやっているそうじゃないか!!」(広島弁丸出し)

この新聞記事とは、大島政允先生と大島衣恵先生が平成二十一年十二月二日から十日間にわたり、ロンドン等三方国四都市で欧州公演をなさったこと、又大島衣恵先生が全編英語による新作能「バゴダ」を上演されたというものである。私はこの時程嬉しく思い、誇らしく感じたことはなく、大島先生に習ってよかったですと、つくづく痛感したものである。

(大島政允先生は喜多流の職分で「重要無形文化財総合指定」を受けておられる、又個人で福山に本格的な能楽堂をもっておられる)

(2) 広島大島会の生い立ち

私が聞いたところによれば、昭和四十年頃に何名かの同好の有志が集まり「福山から大島久見先生(政允先生のご尊父)をお招きして教えを乞おうではないか」との意見が持ち上がり、初代広島大島会会長として

久村文二氏を中心にご尽力頂き実現したとの事である。(その頃久村文二氏は、広島喜多会の会長もなさっておられた)

お稽古の場所は、広島市中区小町の百米道路沿いにある妙慶院(清岸寺)にお願ひする事となり、その後、もう四十五年以上を経過するが、妙慶院の加用さんの格別のお世話により現在まで盛大に続いているところの、まさに栄誉ある会であります。

その後広島大島会の会長は、久村文二氏が長くお世話をなさった後、光成健男氏に引継がれ、氏の献身的なご努力により発展を続けてきたところです。光成氏の突然のご逝去に伴い、短期間ですが小生(松宗勉)が引継いだわけです。(本年三月の総会で、守矢雅彦氏に決定しました。)

(3) 謡曲を習っての所感

お能は室町時代の初めに出来たものといわれておりますので、既に六〇〇年程の時間の差があります。その為、若干難解な点もあり、古めかしいところもあるかと思いますが、習うにつれて何か日本的な良いものが私の中に「スーツ」と入ってきたのではないかと思うようになりました。

私は、昭和二十六年に勤務先の会社に謡曲部が出来ることとなり、それと同時に入門し、現在までおよそ計算上は六十年間続いたこととなりますが、その間半分程度は転勤等で稽古を休んでおります。しかし現在まで一四〇番は習ったと思いますし、「中習」までは済ませたことになっています。(大島先生には、私が定年後の平成三年から師事し、既に二十年近くになります)

お能の曲目は、日本の古典を題材にしたものが多く、中でも源氏物語、平家物語が多くを占めているように思います。その点、取りつき易い一面もあります。私が習った一四〇番のお能についても、夫々情景描写が異なり、謡い方も重いもの、軽いもの、強いもの、弱いもの、速いもの、遅いもの、等微妙に異なり、謡曲の素晴らしい名文章と共にそこが面白く、味わいのあるところだと思えます。特に、夫々の曲のストーリーの内容をよく理解すればする程一層興味がわくと思えます。最近やつとそのことに気がき始めたと言いますか、即ち別の言葉で言えば、「日本古典の一端にふれることが出来、その奥の深さに気付いたこと」永くやつて良かったと思うし、お能の見方、謡曲の楽しみ方ではないかと思うようになつた今日この頃です。

(4) 終わりに

以上、取り留めない話でしたが、私としても近く広島大島会の会長は退きますが、終生体調の許す限り、この愛する広島大島会に籍をおかせていただき、この道を楽しみたいと思っております。

それでは、これからの広島大島会の限らない発展を祈念し、この稿を終わる事と致します。



広島大島会 (昭和59年2月19日)

小謡「宗吉瓦窯」を書いて

森 和 子



小謡「宗吉瓦窯」初披露 (2010.3.28)

もり かず こ
森 和子 氏

大学で万葉集を学び、卒業後は中学高校で教壇に立つ。

2003年より能楽に親しみ、謡・仕舞を喜多流シテ方大島衣恵師に、鼓を大倉流小鼓方久田舜一郎氏に師事。1999年～2004年まで高校演劇を指導。脚本に「姫路城物語」「海幸山幸風ものがたり」「本因坊帰る」「桜のものがたり」他、創作能「瑞泉寺」など。

「讃岐国の宗吉瓦窯跡でお能をします」とお聞きしたのは、一月十七日新年初饗会後の懇親会であった。宗吉で、藤原宮の瓦が焼かれていたこと、すぐそばに港があった、荷を積み出したことも伺った。藤原宮の瓦、すぐにはピンと来なかつたが、とんでもなく古い歴史ロマンであることは感ぜられた。パンフレットを見ると、二重の花弁が十六枚並んだ美しい瓦であった。複式蓮華文軒丸瓦という名であった。この瓦が宮殿を飾り、日の光を受けて銀色に輝いたに違いない。その様は、中国を知らぬ者にも、唐の都を思わせたであろう。藤原宮は、天武天皇の飛鳥浄御原宮から、六九四年(持統八年)に遷都された、日本史上最初で最大の中国風の都城であった。わずか四年で新宮殿を建築するのは、大変な事業であつたろう。そのため幾内だけでなく、讃岐の宗吉でも瓦を焼くことになった。藤原宮の瓦は、急務の国家事業であつた。藤原宮では、白鳳文化が花開き、柿本人麻呂を始めとする宮廷歌人

が活躍した。人麻呂の活動時期は、持統天皇の時代と重なる。藤原宮の謎を秘めたロマンにひたつていた頃、宗吉の小謡を作ってみませんか、とお話をいただいた。藤原宮——柿本人麻呂——宗吉を結び和歌。まずは、万葉集を読み直そうと思った。頁をめくりながら、人麻呂の歌を音読してみる。言霊が立ち上つて胸がしめつけられるような気がする。殊に人麻呂の挽歌は、その人がまだそこにいるかのように語りかけ、ほめたたえる。そうしなければ取り切れない激しい魂のありようを思う。ふと、二二〇番の人麻呂作歌「讃岐の狭岑の島に石の中に死人を見て」という歌が目に入った。人麻呂がなぜ讃岐国に行ったのか、死人とは誰なのか、全くの謎である。「玉藻よし」は、よい海藻が取れるという意味だろうが、この枕詞は、実は人麻呂が作った枕詞である。枕詞はすべて古代からあつたわけではなく、(本来は古代のものであろうが)口誦から記載への

過渡期にあつた人麻呂の時代に作られたものが多数ある。

「人麻呂の作品中に見える枕詞の数は約百四十余种である。その半数は人麻呂の作にはじめて見えるものである。残り半数のうち、更にその約半分は記紀に見えるものであり、あと半分は万葉集中人麻呂より以前の作に見えるもの或は前後不明のものである。」(「枕詞を通して見たる人麻呂の獨創性」『萬葉の作品と時代』澤瀉久孝著)

「玉藻よし」もまた、人麻呂の獨創の枕詞である。実はこの著書は私が卒論で人麻呂の枕詞を研究しようと思ひ立つた論文なのだが、今また「玉藻よし」に出会えるとは思つてもみなかった。讃岐国をうたうには、これしかないと思つた。人麻呂の枕詞を借りよう。そう決めたら、自然と「泥もよし」と浮かんできた。あとは、今まさに宗吉に在る気持ちになつて、窠が山裾に沿つて造られ、夜中煙が立つている様子を詠んだ。出来上がった瓦は船に積まれ、都へと勢いよく帆を上げた。今、船出の時である。



(注)「玉藻よし讃岐の国」は、万葉集二二〇番の柿本朝臣人麻呂の讃岐狭岑嶋での歌中にある枕詞。この枕詞は他の使用例が認められない人麻呂獨創の枕詞である。

小説 宗吉瓦窠

作詞 森 和子
節付 大島政允

和
玉藻よし讃岐の国は泥もよし。
讃岐の国は泥もよし。
三野の吉津の宗吉は。
あしひきの山裾かけて窠のぼり。
夜を越へて煙立つ。
ももしきの大宮藤原宮へ。
蓮華文。軒丸瓦いざ船出せん。
軒丸瓦 船出せん



能「三輪」大島衣恵 喜多流大島能楽堂
(2009.9.20 久保博義 撮影)

能「小塩」大島政允 14世喜多六平太記念能楽堂
(2009.4.26 池上嘉治 撮影)



能「朝長」大島政允 喜多流大島能楽堂
(2009.11.15 久保博義 撮影)

能「班女」大島輝久 14世喜多六平太記念能楽堂
(2009.9.26 神田佳明 撮影)

◀ 2010年 演能ご案内 ▶

開催日	催名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月18日(日)	第220回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「小袖曾我」 佐々木多門 大島輝久 狂言 「鼻取相撲」 野村小三郎 能 「小 塩」 金子匡一
5月 5日(祝)	お能で遊ぼう	10:30	リーデンローズ 練習室	無料・要申込	おうたい・紙芝居 「くらまてんぐ」
5月16日(日)	福山喜多会 社中追善春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無 料	能・舞囃子・素謡
6月20日(日)	第221回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「源氏供養」 大島衣恵 狂言 「因幡堂」 茂山あきら 能 「国 栖」 大島政允
7月28日(水)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	前売り 4,000円	能 「八 島」 大島政允 狂言 「金藤左衛門」 茂山千五郎
8月 8日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光 信 寺 (神石高原町)	前売り 3,000円	能 「敦 盛」 大島政允 狂言 「茶 壺」 井上靖浩
8月 9日(月)	後楽園たきぎ能	18:30	岡山後楽園	前売り 4,800円	狂言 「樋の酒」 野村萬斎 狂言 「二人大名」 茂山千五郎 能 「橋弁慶」 大島政允
9月12日(日)	彦 根 城 能	16:00	彦 根 城	A席 15,500円 B席 15,000円	能 「経 政」 ^{鳥手} 大島政允 狂言 「文相撲」 松田高義 能 「紅葉狩」 出雲康雅
9月19日(日)	第222回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「俊成忠度」 松井 彬 狂言 「盆 山」 茂山千五郎 能 「 砧 」 大島政允
10月17日(日)	福山総合文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無 料	仕舞・素謡
10月31日(日)	東京大島会 大島久見七回忌追善能	13:00	東京喜多能楽堂	S席 12,000円 A席 8,000円 B席 6,000円 2階自由席 3,000円	能 「景 清」 大島政允 狂言 「泣 尼」 野村万作 能 「道成寺」 大島輝久
11月 7日(日)	国民文化祭 能 楽 の 祭 典	未 定	笠岡文化センター (笠岡市)	未 定	能 「殺生石」 大島政允
11月 9日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無 料	能学習発表・能鑑賞会
11月21日(日)	第223回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「鉢 木」 長田 驍 狂言 「金藤左衛門」 茂山千五郎 能 「黒 塚」 大島衣恵
11月23日(日)	広 島 大 島 会	未 定	アステールプラザ能舞台	無 料	能・舞囃子・素謡
11月28日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能 「鬼界島」 大島政允

編集デスクより

- 昨年末、3週間の長期ヨーロッパ公演「清経・PAGODA」は各地で多くの方々に感動を与え、大成功を収めました。ジャネット女史とエマート氏を始めイギリス人、アメリカ人、日本人、3ヶ国の出演者とスタッフが最後まで結束、協力して出来上がった素晴らしい公演でした。関係各位に感謝です！
- 「神が降りる！」森和子氏作詞の小話「宗吉瓦窯」は正にこの言葉のように出来上がりました！『玉藻よし 讃岐の国は泥もよし……』練習も充分できないままでしたが、讃岐の子ども達は新能当日、立派に謡いましたね。有難う！
(Y.O.)

喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
<http://www.noh-oshima.com>



新年初謡会 (2010.1.17)